音　楽　科

鑑賞力と表現力の往還により，音楽を創造的に表現できる生徒の育成

―創作を効果的に位置付けたカリキュラムの提案―

三村　悠美子

1　主題設定の理由

(1) 共通研究主題との関連

平成 29 年３月公示の学習指導要領第２章第５節音楽では，音楽科の目標として，「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成すること」が目指されている。また，この資質・能力の育成に向けて，「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，音楽的な見方・考え方を働かせ，他者と協働しながら，音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりするなど，思考，判断し，表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ること。」が求められている。

音楽科にとって，この「主体的・対話的で深い学び」を実現する際の鍵となるのは，「音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」である。そして，「音や音楽をより高いレベルで捉えられるようになること」が，より質の高い深い学びにつながると考える。そこで，第１次では，鑑賞領域に着目し，作曲家の工夫に迫る鑑賞の授業，そのような授業を核とした効果的な題材構成の在り方について研究した。

なお，本校音楽科では，「音や音楽をより高いレベルで捉えられるようになる」には，次の６つのプロセスがあると考えている。(1)

①　どのように音楽を捉えればよいか，捉え方が分かる。
②　捉え方が一通りではないことを，理解する。
③　知識を相互に関連付けたり，より精緻な情報を獲得したり精査したりすること等を通して，捉える力そのものが構築される。
④　鑑賞領域においてだけでなく表現領域でも，①～③の過程を通して，捉える力が育まれ培われることを体験する。
⑤　それぞれの領域で構築された力（＝捉える力）が修正され，さらにより深い捉え方（＝知識・技能）へと深化する。
⑥　鑑賞領域，表現領域それぞれで培われた力（＝鑑賞力・表現力）が往還され，その結果，双方の力が創造的な音楽表現力の両輪となり，個々の知がクラスの知として融合・発展していく。

以下は，①～⑥を図示したものである（**図１**）。第１次は，このプロセスの①～③を中心とした研究であった。対象が第１学年であったこともあり，「初期段階で聴き方（捉え方）の適切な指導」を行い，「同じ音楽を形づくっている要素に着目して数曲鑑賞」したり，「同一のテーマで作曲された楽曲を比較鑑賞」したり，「一つの楽曲を様々な視点から多面的・多角的に鑑賞」したりすることで，①～③の高まり，深まりを目指した。また，「いかに個の考えを深められる学習活動にするか」に着目して，個の考えや気付きの共有方法も段階を追ってステップアップさせた。「音や音楽を聴く力（捉える力）」に関する調査問題を研究に取り組む前後で行ったが，１回目の調査と２回目の調査では，明らかに数値に伸びがあった。このことから，第１次研究には成果があったと言える。（詳細は，本校「研究紀要第 53 号」参照。）

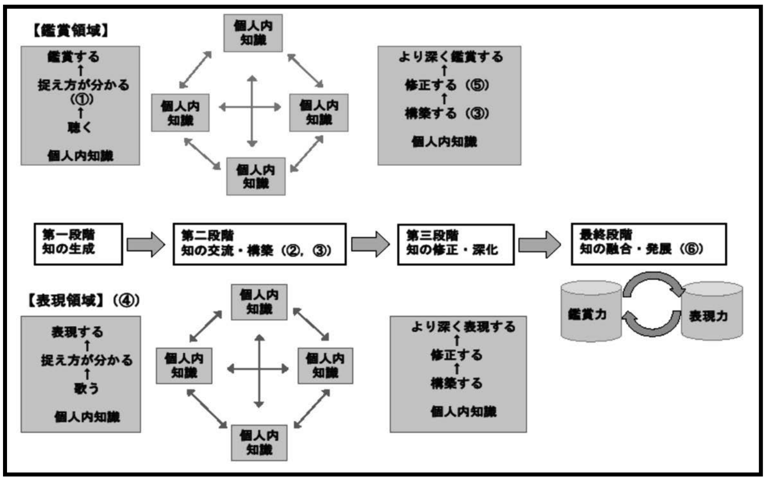

図１　音や音楽をより高いレベルで捉えられるようになるための６つのプロセス

⑵ これまでの研究との関連

⑴ 共通研究主題との関連でも述べたように，第１次研究により，「音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えること」，「音や音楽をより高いレベルで捉えられるようになること」について，生徒の力を伸ばすことができた。しかし，第１次が「鑑賞」に特化した研究だったため，「生徒の鑑賞力と表現力がどの場面でどのように往還されたのか」や「生徒自身が，鑑賞力と表現力の往還を実感できているのか」についての検証はできていない。そこで，第２次では，**図１**の④～⑥を中心に研究を行うことにした。具体的には，これまでの研究成果を生かした鑑賞領域の授業を行うことに加え，表現領域，特に創作分野の授業改善及び題材構成についての研究である。これらを踏まえ，昨年度は「小学校での音楽づくり」経験についての事前調査を行い，生徒の実態を把握した後，生徒が創作しやすい「つくる際の約束事」について吟味したり，「楽譜」への抵抗感を軽減する工夫について考えたり，創作の授業までにどのような活動のステップがあれば効果的かを考えたりして，題材を構成し，実践した。実践後，調査問題を行い，結果を分析したが，「作曲家の技法に気付く力」，「作曲家の技法の違いに気付く力」は，多くの生徒に身に付いており，「作曲家の工夫を活用する力」についても，多くの生徒が評価３または４であったことから，一定の成果を上げることができたと言える。（詳細は，本校「研究紀要第 54 号」参照。）

⑶ 生徒の現状と課題

昨年度は対象が第１学年だったため，自分の作品に作曲家の工夫を活用するには創作の知識・技能面で困難さを感じる生徒が多く見られた。つまり，十分な鑑賞力と表現力の往還や，創造的な表現の追求ができたとは言い難い。また，「創作を題材のどの位置に配列するか，年間でどの程度配列するのがよいのか」についても，検討の余地がある。

そこで今年度は，第２学年を対象にこれまでの研究を生かした創作分野の授業を行い，さらに題材や年間における効果的な創作の配置に着目したカリキュラムを実践することで，生徒が１年次からどのような力がどの程度伸びたのかを測りたい。以上のことから，今回の研究主題を設定した。

２　音楽科で目指す生徒像

音楽科で目指す生徒像は，研究主題にもあるように，①「鑑賞力と表現力を往還できる」，②「①を基に音楽を創造的に表現できる」生徒である。ただ，現段階では，生徒は創造的なアイデアをもっていても，それらをどのように体系付ければよいか，どのように表現すればよいか，深めていけばよいかの理解が十分でない。鑑賞領域と創作分野を結び付けたカリキュラム，創作分野を効果的に位置付けたカリキュラムにより，生徒の鑑賞力と表現力の双方を伸ばしたい。

3　研究計画

(1) 研究仮説

・　図１の６つのプロセスを意識したカリキュラムを実施することで，生徒が「音楽を創造的に表現できるようになる」のではないか。

・　創作分野を効果的に位置付けたカリキュラムを実施することで，生徒が「音楽を創造的に表現できるようになる」のではないか。

(2) 研究計画

①　対象生徒　本校第２学年　178 名

②　期間　　　平成 30 年６月～令和２年３月

③　検証方法　同一生徒を対象に，以下の調査問題を①平成 30 年 12 月（鑑賞領域や創作分野の学習経験はあるが，まだ経験が浅い状態）と，②令和元年 12 月（鑑賞領域や創作分野の学習を積み重ねた状態）の２回実施する。本校音楽科が作成したルーブリックを基に，生徒の記述内容を数値化し，１回目の調査と２回目の調査での変容を分析する。

【調査問題】　調査問題は，次の２問である。（自由記述）

(1) 鑑賞領域で，

①　作曲家のどのような技法に気付くことができたか。

②　作曲家による技法の違いに気付くことができたか。

(2) 創作分野で，

①　作曲家のどのような技法をどのように活用したか。

②　自分なりのオリジナリティをどのように追求したか。

4　実践の概要

(1) 授業実践１の概要

以上を踏まえ，次の①～⑤にポイントを置き，５～７月に第２学年を対象に表１のような実践を行った。

表１　令和元年５月～７月にかけて実施した，題材の指導計画（全８時間）

	時	学習内容	時数	領域
第一次	1	重なりを読み解く～「フーガト短調」～ 捉える～「重なる」面白さ～	1	鑑賞
	2	味わう～私の考える「フーガト短調」の魅力～	1	
第二次	1	重なるから引き立つ～「浜辺の歌」～ 工夫する～歌詞や旋律だけでなく伴奏からも～	1	表現（歌唱）
	2	表現する～声で伝える難しさ～	1	
第三次		**重なりをもとに～ハーモニーに合わせて旋律をつくろう～**	**1**	**表現（創作）**
第四次	1	重なりをつくる～アカペラ混声三部合唱で「夏は来ぬ」～ 重ねる～声だけで創る面白さ～	1	表現（歌唱）
	2	重なる～声だけで創る難しさ～	1	
第五次		**重なりをつくる②～経過音や刺繍音を使ってカノンをつくろう～**	**1**	**表現（創作）**

①　「題材を貫く共通のテーマ」を何にするか

本校音楽科では，これまでも題材を通して共通の音楽を形づくっている要素を扱うことを大切にしてきた。本研究においては，「生徒が鑑賞力と表現力の往還を図りやすい題材構成にすること」が重要である。そのため，この時期に鑑賞教材として取り上げる「フーガト短調」（Ｊ．Ｓ．バッハ）を効果的に扱うには，題材を貫く共通のテーマとして何がふさわしいか考えた。「フーガト短調」の面白さは，やはりフーガという音楽の構造にある。そこで，「重なり」をテーマとし，それ以降の表現領域の授業

も構成することにした。

② 鑑賞の授業で培った力をどの程度，どのように活用させるか

鑑賞教材として，「フーガト短調」を持ってくることは確定したが，生徒にフーガをつくらせることは，創作の知識・技能面で難しすぎる。そのため，「重なり」を生かした創作活動として，現時点の生徒が可能なレベルの創作にするにはどうすればよいかを考えた。まず，これまでも第２学年を対象に「コードを組み合わせてハーモニーをつくり，そのハーモニーに合わせた旋律創作」は行ってきた（ただし，この時期ではなく，例年は後期に入ってから。）ので，この授業を本題材に取り入れることにした。また，同時期に「カノン１」（「中学生の器楽」／教育芸術社）を取り上げ，旋律が重なり合うことでハーモニーが生まれる面白さ，美しさを自分たちで演奏することによって感じ取らせ，「重なり」をつくることへの興味・関心を高められるようにした。さらに，カノンとフーガの違いについて学習した上で「フーガト短調」を鑑賞することで，Ｊ．Ｓ．バッハの匠の技を改めて感じられるよう，教材同士の組み合わせを工夫した。そして，これまでにも第２学年を対象に行ってきた「夏は来ぬ」（佐佐木信綱　作詞，小山作之助　作曲）のアカペラ混声三部合唱も本題材に取り入れ，「重なり」をつくる難しさに気付かせると共に，「重なり」が出来上がった時の達成感も味わえるようにした。このような題材構成にすることで，生徒の「重なり」に対する興味・関心を高め，鑑賞の授業で培った力を活用した創作にできるのではないかと考えた。

③ 鑑賞の授業で培った力を活用する場面をどこにもってくるか

「重なり」を共通のテーマとして，「フーガト短調」の鑑賞，器楽での「カノン１」の演奏，「ハーモニーに合わせた旋律創作」，「アカペラ混声三部合唱」を組み合わせることを決めたので，次はそれぞれの教材を扱うタイミングをどうするかについて考えた。大切にしたことは，①ある程度，「重なり」に興味・関心をもってから自分たちもつくる活動を行う方が，その難しさや面白さを理解できている分，生徒も意欲的に取り組めるのではないか，②「つくる」ことに対しては，まだ抵抗感がある生徒もいるため，グループでの創作と個人での創作の両方の場面がある方がよいのではないか，の２点である。

④ 昨年度の実践をどう生かすか

第２学年の生徒は，昨年度，１年次に「ベースに合わせた旋律創作」は行っている。昨年度の学びを生かした創作にすることを考えると，「ハーモニーに合わせた旋律創作」を本題材のゴールにもってくるのは少し弱いように感じた。せっかく「カノン」について学習したので，自分たちでも「カノン」をつくらせることはできないか，「カノン」をつくるためには「ハーモニーに合わせた旋律創作」ができていないと難しいが，上手く題材を構成し，旋律をつくる際の約束事を適切に設定すれば可能ではないかと考えた。

⑵ 授業実践１の成果と課題

これまでに実践してきた授業であっても，題材を貫く共通のテーマを設定し，それを基に配置を変更したり，授業と授業を効果的に結び付けたりすることで，創作以外の授業にもメリットがあった。どの授業も一つの授業としては成り立っており，これまでも学習効果は感じていたが，音楽を形づくっている要素だけでなく共通のテーマによって題材をまとめると，生徒にとっても教師にとっても，学習のまとまりを意識でき，その視点でどの授業にも取り組むことができていた。また，「創作の授業はどうしても時間がかかる」というイメージがあったが，「今回の創作の授業ではどこまでを押さえどころにするか」を教師が見極め題材に上手く組み込めば，短時間でも成果を挙げることができ，他の領域・分野の授業にも効果的であることが分かった。

しかし，「鑑賞領域で培った力を活用すること」の難しさは課題として残った。昨年度実施した，組曲「展覧会の絵」を鑑賞→「『イメージを音にする』という技を自分たちもやってみよう」という創作は，

作曲技法という点ではあまり「作曲家の匠の技」を活用しているとは言えなかった。それと比べると，今回は幾分，技法面で「作曲家の匠の技を活用した創作」にできたが，「どのレベルまでは生徒に活用させられるか，活用させたいか」の設定が授業の肝であり，教師の力量が問われると感じた。また，「どの楽曲をどのような視点で鑑賞するのか」も重要になってくるため，引き続き，教材分析を続けていくことが必要であると感じた。

(3) 授業実践２の概要

(2) 授業実践１の成果と課題を踏まえ，10 月～11 月に第２学年を対象に題材「温故知新～変える　変わる　つながる～」（**表２**）を実践した。なお，この題材における「題材を貫く共通のテーマ」は「変化」，「活用する作曲家の匠の技」は「動機」，「ライトモチーフ」である。

表２　令和元年 10 月～11 月にかけて実施した，題材の指導計画（全５時間）

	時	学習内容	時数	領域
第一次	1	変化を読み解く～「交響曲第５番ハ短調作品67」～ 変わらないけど変わってる？～ソナタ形式の面白さ～	1	鑑賞
	2	私の考える「交響曲第５番ハ短調作品67」の魅力	1	
第二次		変化はつながる？～Ｌ．ｖ．ベートーヴェンとR.ワーグナー～	1	
第三次	**1**	**変化を生み出す～「桃太郎」でつくろう～ 「『〇〇』が･･･しているテーマをつくろう」**	**1**	**表現（創作）**
	2	**「『〇〇』が･･･しているテーマをつくろう」その２**	**1**	

<table>
<tr><td colspan="3">本　時　案（計画　第三次の第２時）</td></tr>
<tr><td>目　標</td><td colspan="2">○　様々な工夫によって，音楽表現が多層的・多様的な広がりをもつことに関心をもち，仲間との意見交換を通して音楽活動の奥深さを知るとともに，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組む。</td></tr>
<tr><td>学　習　活　動</td><td>指導・支援と留意点</td><td>評　価　等</td></tr>
<tr><td>１　前時までの学習を振り返り，本時の学習課題を確認する。</td><td>１　前時では，「桃太郎」の４つの場面を表すテーマ（旋律）をグループと個人で創作したが，相手に自分の表現したいイメージを伝えるには音楽を形づくっている要素を様々に工夫する必要があったこと，同じイメージを表現する場合も，音楽表現の創意工夫の仕方は様々であったことを全体で確認する。本時では，既習の鑑賞曲における作曲家の工夫や，前時までの学習で得たアイデアを生かしながら，個人でテーマ（旋律）をつくることを伝える。</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">鍵盤ハーモニカを使って「『〇〇』が…しているテーマ」をつくろう</td></tr>
<tr><td>２　表現したいイメージを音で表現するには，どのように音楽表現を工夫すればよいかを考えながら，個人でテーマ（旋律）をつくる。</td><td>２　全体で以下のルールを確認する。
・鍵盤ハーモニカで出せる音を使ってつくる。調の限定はかけない。
・桃太郎の『いぬ』，『さる』，『きじ』，『鬼』の４つから２つを個人で選択し，「『〇〇』が…している様子を表したテーマ」をつくる。
・拍子は４分の４拍子か８分の６拍子にし，４小節でつくる。
・リズムは，選択肢から選んでも，自分でつくっても，どちらでも構わない。
・速度も自由に設定して構わない。自分のイメージに合う速度にする。</td><td></td></tr>
<tr><td>(1) 個人で１つ目のテーマ（旋律）をつくる。</td><td>(1)　一つの音楽を形づくっている要素の工夫だけでなく，複数の要素の工夫を組み合わせることから生まれる音楽の特徴を生かしてつくるよう助言する。</td><td></td></tr>
<tr><td>(2) (1)でつくったテーマ（旋律）をペアで共有する。</td><td>(2)　４小節全てが完成していなくても構わないので，演奏して発表するよう伝える。また，発表の際は，「表</td><td></td></tr>
</table>

	現したいイメージとそのイメージを音で表すためにどのように音楽表現を工夫したのか」も発表するよう伝える。生徒が他者の作品を聴くことで，多様な音楽表現があることに気付き，つくる際のヒントを得られるようにする。	
3　学習活動２(2)での気付きや，感じたこと，前時までの学習を生かして，個人で２つのテーマ（旋律）を完成させる。	3　「自分の表現したいイメージが伝わるテーマ（旋律）にすること」が本時の目標であるので，「１つ目のテーマ（旋律）」が，学習活動２でつくったものから変わっても構わないことを伝える。また，他者に聴いてもらい，その感想から客観的に自分の作品を判断したりするなど，つくる過程も工夫するよう助言する。	主体的に学習に取り組む態度 様々な工夫によって，音楽表現が多層的・多様的な広がりをもつことに関心をもち，仲間との意見交換を通して音楽活動の奥深さを知るとともに，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組もうとしている。（観察，ワークシートへの記述，発言の内容）
(1)　ペアで意見交換をしながら，個人で２つ目のテーマ（旋律）をつくる。	(1)　学習活動２(2)で行ったように，「自分がつくったテーマ（旋律）は，イメージが相手に十分伝わるものになっているか」をペアと検討しながら進めるよう助言する。また，相手にアドバイスをする際は，「…を表現するならば，もっと音の高さを～～した方がよい」のように，何をどのように創意工夫すればよいか具体的にアドバイスをするよう助言する。	
(2) 本時につくったテーマ（旋律）のうち，１つを班で共有する。	(2) 発表の際は，「どのようなイメージを表現したテーマ（旋律）か」を伝えてから発表するよう伝える。	
(3)　学習活動３(2)で共有したテーマ（旋律）のうち，数曲を全体で発表，共有する。発表されたテーマ（旋律）を聴いて，「何を表現したテーマ（旋律）だと思ったか」を個人や班で考える。	(3)　班の中で「一番表現したいイメージが伝わるテーマ（旋律）」を選ぶよう伝える。発表する際は，敢えて「何を表現したテーマ（旋律）か」を言わずに発表するよう伝える。発表を聴いた後に，「何を表現したテーマ（旋律）だと思ったか」を考える場面を設けることで，イメージを音にして他者に伝える難しさや面白さ，音楽表現の創意工夫が多種多様であることについて生徒が考えるきっかけとなるようにする。	
4　ワークシートの「今日の活動を振り返って」を記入し，本時の学習を振り返る。	4　「自分が本時にどのような音楽表現の創意工夫をしたか」，「他者に自分のテーマ（旋律）を聴いてもらったり，他者のテーマを聴いたりすることで気付いたことは何か」，「他者からのアドバイスがどのように音楽表現の創意工夫に生かされたか」について，具体的に記述するよう助言する。	

5　研究の成果と課題

次のルーブリック（**表３**）を基に，調査問題の記述内容を数値化し，昨年度のものと比較した結果が**表４**（１年次の有効回答数は 177 名，２年次の有効回答数は 170 名），各問における１年次と２年次の数値の変化を示したのが**表５**である。ただし，**表５**については，１年次のみ欠席の生徒が３名いるため，合計人数は 167 名となっている。

表３　生徒の調査問題の記述を分析するルーブリック

	問題１　鑑賞		問題２　創作	
	①　作曲家の技法に気付く力	②　作曲家の技法の違いに気付く力	①　作曲家の工夫を活用する力	②　オリジナリティを追求する力
1	リズム，音高，旋律線，拍子など，１つ以上の項目に気付くことができない。	技法の違いを１つ以上，挙げることができない。	作曲家の工夫を１つ以上，活用することができない。	作曲家が行っている工夫の中の１つ以上の項目を，真似することができない。
2	リズム，音高，旋律線，拍子など，２つ以上の項目に気付くことができる。	技法の違いを２つ以上，挙げることができる 。	作曲家の工夫を，音楽表現と１対１の関係で関連付け，活用することはできるが，未熟なレベルである。	作曲家が行っている工夫の中の１つの項目を真似して，少しの工夫をすることができる。
3	リズム，音高，旋律線，拍子などの項目と音楽表現を，１対１の関係で，結び付けることができる。	技法の違いを，その楽曲固有の音楽表現と１対１の関係で，関連付け，挙げることができる。	作曲家の工夫を，音楽表現と１対１の関係で関連付け，活用することができる。	作曲家が行っている工夫の中の１つ以上の項目を真似して，基本的な工夫をすることができる。
4	リズム，音高，旋律線，拍子などの項目と音楽表現を，１対複数の関係で結び付けることができる。	技法の違いを，その楽曲固有の音楽表現と１対複数の関係で，関連付け，説明することができる。	作曲家の工夫を，音楽表現と１対複数の関係で関連付け，活用することができる。	作曲家が行っている工夫の中の１つ以上の項目を基に，自分なりの発展的な工夫をすることができる。
5	リズム，音高，旋律線，拍子などの項目と音楽表現を，独自の視点で，結び付けることができる。	技法の違いを，その楽曲固有の音楽表現だけでなく，それ以外とも関連付け，自分なりに説明することができる。	作曲家の工夫を，音楽表現と１対複数の関係で関連付け，独自の視点で活用することができる。	作曲家が行っている工夫の中の１つ以上の項目を基に，自分なりの工夫が，上級レベルでできる。

表４　ルーブリックで評価した結果

	問題1 鑑賞								問題2 創作							
	① 作曲家の技法に気付く力				② 作曲家の技法の違いに気付く力				① 作曲家の工夫を活用する力				② オリジナリティを追求する力			
	1年次		2年次		1年次		2年次		1年次		2年次		1年次		2年次	
1	0人	0.0%	0人	0.0%	45人	25.4%	1人	0.6%	5人	2.8%	1人	0.6%	29人	16.4%	2人	1.2%
2	3人	1.7%	2人	1.2%	1人	0.6%	7人	4.1%	19人	10.7%	9人	5.3%	28人	15.8%	4人	2.4%
3	102人	57.6%	50人	29.4%	74人	41.8%	52人	30.6%	87人	49.2%	37人	21.8%	77人	43.5%	95人	55.8%
4	72人	40.7%	116人	68.2%	57人	32.2%	110人	64.7%	66人	37.3%	115人	67.6%	43人	24.3%	62人	36.5%
5	0人	0.0%	2人	1.2%	0人	0.0%	0人	0.0%	0人	0.0%	8人	4.7%	0人	0.0%	7人	4.1%
計	177人	100.0%	170人	100.0%	177人	100.0%	170人	100.0%	177人	100.0%	170人	100.0%	177人	100.0%	170人	100.0%

表５　各問における１年次と２年次の数値の変化

	問題1 鑑賞		問題2 創作	
1年次の数値－2年次の数値	① 作曲家の技法に気付く力	② 作曲家の技法の違いに気付く力	① 作曲家の工夫を活用する力	② オリジナリティを追求する力
-3	0人	0人	1人	1人
-2	0人	2人	3人	1人
-1	16人	20人	13人	25人
0	86人	57人	63人	54人
1	63人	48人	67人	41人
2	2人	15人	18人	33人
3	0人	25人	2人	11人
4	0人	0人	0人	1人
計	167人	167人	167人	167人

以下，検証結果を考慮しつつ，指導及び授業実践を振り返り，成果と課題を考察する。

問題１鑑賞　①作曲家の技法に気付く力は，１年次ですでに比較的高い数値を示していたが，今回は昨年に比べ，さらに全体的に数値が伸びていた。これは，１年次に音楽を形づくっている要素の知覚と感受を１対１対応で複数記述することができていた生徒（評価３）が，複数の音楽を形づくっている要素が相まってその楽曲の曲想を生み出しているということに気付くことができるようになった（評価４）ことが大きい。また，②作曲家の技法の違いに気付く力も，昨年は作曲家１人分についてしか記述できていない生徒が多く，評価１の生徒が多かったが，今回は２人以上の作曲家の技法について述べることができており，全体の 95%を超える生徒が評価３または４であった。同一のテーマで作曲された楽曲の比較鑑賞や，一つの楽曲を様々な視点から多面的・多角的に鑑賞するなど，これまでの鑑賞授業の蓄積により，それぞれの作曲家の匠の技に気付く力が高まったと考えられる。

問題２創作　①作曲家の工夫を活用する力は，評価４の生徒の数が大きく伸びた。これは，繰り返し創作に取り組むことで生徒が「どのようにつくればよいのか」を分かってきたこと，創作の中でも段階を踏んで徐々に作曲家の技を活用できるようにしたこと，「展覧会の絵」の時とは異なり「鑑賞で発見した作曲家の技法を用いた創作」ができる段階まで生徒が成長してきたことが要因として挙げられる。②オリジナリティを追求する力も，「自分なりの工夫」を発揮できるテーマの設定，考えた工夫を音で表現する機会を題材の中に多く設けたことで数値が伸びたと考えられる。また，他者とアイデアを共有する時間を設けたことで，「同じテーマを選んでいても，〇〇さんと自分では～～という工夫の違いがあるなぁ。」ということに生徒が気付き，「この工夫は自分のオリジナルだ。」という思いにつながったと考える。中には，昨年評価１だった生徒で今年度評価が４や５になった生徒もおり，継続的な創作授業を行うことの効果が感じられた。さらに，生徒からは「自分で生み出すということは難しかったけれど，とても面白いと思った。」，「自分でつくってみたことで，本物の作曲家はやっぱり凄いと思った。」という感想も出ており，本校音楽科が目指している「鑑賞力と表現力を往還し，音楽を創造的に表現できる生徒」の育成につながったと感じる。

しかし，調査問題の結果で言えば，評価１または２の生徒がいたのは事実である。これらの生徒の中には授業のワークシートでは評価３または４レベルの生徒が多く，おそらく時間が不足し，調査問題に答えられなかった可能性が高い。ただ，中には十分満足できる結果ではなかった生徒もいた。また，評価５はどの問題に関してもかなり高いレベルで基準を設定していたため，評価５の生徒はほぼいないという結果になった。このような調査を実施する際，設問や調査時間，評価基準の設定が適切かどうかが生徒の力を正しく測ることにつながるため，この部分に関しては今後の課題である。

以上の結果から，今年度の授業改善は，生徒の鑑賞力，表現力を伸ばすことにつながり，また，生徒がそれらの力を往還させて音楽表現の創意工夫を生み出す力も伸ばすことにもつながったと考える。「作曲家の匠の技」は，多種多様である。だからこそ，「生徒をどのタイミングでどの楽曲に触れさせるのか」，「生徒が楽曲から得た『匠の技』を創作に限らず活用できる場面をどのように設けるのか」，そして，「生徒が『匠の技』をより活用しやすくするために，何をどのように工夫するのか」が重要である。これらをさらに吟味し，これからの授業改善に生かしたい。

引用文献

1）　大串健吾・桑野園子・難波精一郎監修，小川容子他編集『音楽知覚認知ハンドブックー音楽の不思議の解明に挑む科学ー』(2020) 北大路書房「第５章　音楽学習と教育」pp. 117-139

参考文献

1）　文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説音楽編』
2）　文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説音楽編』
3）　国立教育政策研究所(2016)『国研ライブラリー　資質・能力［理論編］』
4）　奈須正裕(2017)『「資質・能力」と学びのメカニズム』
5）　高木展郎　編著(2016)『これからの時代に求められる資質・能力の育成とは』
6）　岡山大学教育学部附属中学校(2017)『研究紀要第 53 号』，pp.　73-80
7）　岡山大学教育学部附属中学校(2018)『研究紀要第 54 号』，pp.　39-44